

《講 演》

収載にあたって

ここに掲げたのは、昭和59年6月、第七回児童文化研究集会における講演の記録である。

小宮山量平氏に、ご多忙中にもかかわらず、講演をおたのみした。

小宮山氏は大正15年、上田市生まれ。昭和14年東京商大（現一橋大）を卒業。22年に株式会社理論社を創業し、以来出版業に携り、34年ころから児童書を出版、創作児童文学を進めわが国での創作児童文学をリードしてきた方である。出版ジャーナリストとしてもたいへん良心的な、その意味で出版界を代表するひとりといえよう。

私ごとになるが、私が昭和40年から41年にかけて、アフリカを放浪した前後に、アフリカ人の植民地からの解放、独立運動等に、日本人としてはきわめて少数ながらコミットし、活動していた人たちの中心人物に、野間寛二郎氏がおられた。この野間氏を中心にしたヒューマンな人たちの企画したアフリカに関する雑誌や、アフリカで独立運動に身を挺した人たちの記録等を、快く出版し続けてくれたのが、理論社であった。当時、高度経済成長下にあつて、わが国では関心の薄かった領域、商業出版としては引き受け手のなさそうな、しかし同じアジア・アフリカ人としては重要な問題を孕んでいる領域の出版を、引き受けてくれたのが理論社であった。私が理論社という出版社の存在を知ったのは、そのときからで、別に児童文学がきっかけではなかった。

けれども、上田女子短大に奉職する身となって、上田駅前・若菜館一階の喫茶室へ、ときおり立ち寄り、その棚に理論社刊の児童図書のずらりと並んでいるのを見ているうちに、小宮山氏を児童文化研究集会の講演に招いてみたくなった。正直なところ以上がきっかけである。

テーマは「創作児童文学の時代を築く」であったが、小宮山氏は、私どもの期待以上に、上田あるいは上小盆地の土地柄、その文化史的特性、近代に入ってから、人間の根源的自由を求める姿勢において、この地にはよき先達が多勢いらしかったこと、その先進性等をふくめて、たっぷりお話して下さった。児童文学、児童文化のことから、若人に直接かわるわが国の将来にいたるまで、広く、深く、たいへんよいお話をちょうだいした。

本学の国文科、幼児教育科の学生はもとより、広く多勢の方々が、読んでくださることを希望する。

なお、講演を活字化するに際して、青木千代吉先生に、テープ起こしをわずらわし、また話しことばをやや整理したが、その点で文責は三田にあることを付記しておく。

三 田 英 彬